日本教育新聞　平成25年9月9日

いじめ問題に立ち向かう

予防教育②

—24—

山崎　勝之　鳴門教育大学大学院教授
予防教育科学センター所長

心身健康と環境適応へ　自律性・対人関係性養う

【予防教育の光景】教員研修センター主催（文部科学省共催）の「いじめの問題に関する指導者養成研修」に出掛けてみた。3日目の様子がおかしい。この日は4人も講師がいる。ボスらしい人が新しい教育を熱く語り始めた。妙な講演だ。アニメあり、音楽あり、おまけに時折、天から声が降ってくる。聞いたことがない理論をぶちまけたかと思うと、第2部は模擬授業をやるという。できるのか。こちらは100人の参加者だ。驚く演出が続く。授業の仮想空間を見事につくり、現場の雰囲気を見せつける。

翌日、鳴門教育大学に電話をかけていた。2カ月後には、250キロ離れたこちらの町で実際に授業をやるという。見てもらって勝負だという。その自信は何なのだ…。

▼情動・感情かき立て、心の要素を記憶

医療は科学になろうともがいている。学校教育は、なろうという意思さえない。学校では、子どもの生活上の営みを健全なものに育成しようとする。その育成が科学と無縁のところで進められるのは納得いかない。

こうして、新しい学校予防教育は科学的であろうとする。科学的であるためには、自然科学や一部の社会科学で培われたエビデンス（科学的根拠）をふんだんに使う。教育目標、授業の方法、効果評価の全てにわたり、可能な限りエビデンスを適用する。

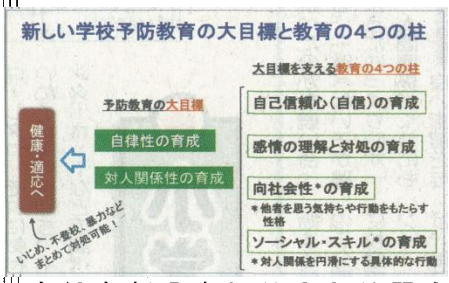
中でも、理論的な背景が目玉になる。近年の脳科学は、これまで手が出なかった無意識や意識の領域に踏み入り始めた。人の営みの95%は無意識的に行われると言われるようにもなった。とりわけ、情動の機能が興味深い。情動は、生起したときはほぼ意識できない身体的な反応である。その情動が強く、まとまって意識に上がったとき、特定の名称（悲しい、怒ったなど）で呼べる状態になる。それを感情という。

この情動や感情は車でいえばガソリンで、ものの見方、考え方、振る舞い方など（以下、心の要素）はハンドルなど装備になる。こう考えると、情動や感情が働かないと心の要素は動かない。この予防教育では、授業で子どもたちの情動をかき立て（一部は感情になる）、その状態で望ましい心の要素をたたき込む。そして、情動と感情に抱かれるように、学習された心の要素がセットで記憶化される。

日常で類似した場面に遭遇したとき、記憶内の情動・感情に先導され、心の要素が動き出す。これがこの授業の成り立ちである。「子どもは遊びの中で学ぶ」とはよく言ったものだ。このような心の動きが、遊びでははっきりと確認される。

▼ベース総合教育とオプショナル教育

この予防教育は「いのちと友情の学校予防教育」と呼ばれ、その英語の頭文字を取ってトップ・セルフ（TOP SELF）とも呼ばれている。そこには、ベース総合教育とオプショナル教育がある。ベース総合教育は、子どもの心身の健康と適応を総合的に守る教育で規模も大きく、全て実施すると、小学3年から中学1年まで全160時間の授業になる。他方、オプショナル教育は、いじめや不登校など特定の問題に焦点を当てた教育で、10を超えるプログラムが開発されているが、その規模は小さい。本シリーズでは、その効果の大きさから、ベース総合教育（以下、予防教育と呼ぶ）を紹介していく。



▼目標と四つの教育の柱

予防教育が直接的に目指すことは自律性と対人関係性の育成になる。これらが十分であると、心身健康で、生活する環境に適応できることには多くのエビデンスがある。自律性は、自分への自信、他者への信頼、内からのやる気から成る複合性格である。内からのやる気は、そのことをやることと自体に興味を持ち、頑張るやる気である。対人関係性は、自分は他の人を好意的に見ている、他の人からも好意的に見られているという安定した感覚の下、他の人と同じ気持ちになったり、同情したり、助けたりする行動をもたらす性格である。実に大きな目標が設定されている。そこで、この下に4本の教育の柱が立てられた＝図。自己信頼心（自信）、感情の理解と対処、向社会性、ソーシャル・スキルの各育成である。この四つの教育の柱が各学年8時間ずつ、合計160時間になる。

ここまで読んでくると、いじめという言葉があまり出てこないことに気付く。調べたところ、いじめも、不登校も、自殺も、この自律性と対人関係性が備われば避けることができる問題であることが分かった。前回、いじめ問題の解決には相当な労力と時間が要ることを指摘した。そうならば、いじめの教育をすれば、それだけで手いっぱいで、不登校や自殺などの予防教育はできないことになる。ところがそうではない。これは本当に幸いである。

本ファイルの著作権は日本教育新聞社に帰属します。記事・本文・画像の、無断転載は固くお断りいたします。